「建てない」時代の建築教育

An Architectural Education on the Age of “Non-Building”

山 本 和 恵^{※1}

Kazue YAMAMOTO

1. 「建てない」選択

社会状況が大きく変化している現在、工学教育のあり方も見直しが必要な時期にきている。筆者が取り組む「建築分野」では、少子高齢化社会の中で持続可能社会を支える社会基盤づくりにおける役割は大きく、従来のあり方と比して質的变化が求められている。あらゆる知見を「建てる」ために、総合化、統合化する総合芸術あるいは社会資本とされてきた建築の価値観を、必ずしも「建てない」という選択肢も含んだ新たな局面へと進化させる「職業倫理の再構築」が必要な時代にきている。なおして使う、使用目的を変えて使う、使い方を提案するなど、我々の役割は、必ずしも「建てる」ことに限定されない。

2. コーディネートの素養

ものづくりの過程の中で利用者との合意形成の必要性や、個々の事情を勘案したきめ細かい提案の必要性など、専門家に求められる役割も近年変化してきている。必ずしも「建てない」時代の重要な建築教育の1つが、「コーディネーター教育」である。

筆者は研究ベースで医療・福祉と建築の中間領域の形成を目指した『環境療法士』の職能を提案している。建築技術者が医療・福祉の現場で活躍する姿を目指した研究である。「アセスメント」や「カウンセリング」などの領域に踏み込み、個々の必要性に合わせた環境整備ができる職能である。

問診や告知の方法論や演習が医学部教育に取り入れられるようになってきたように、コミュニケーション能力開発は、建築教育にとっても、より重い位置づけが必要である。また他者との関係性の中で、発展的な結論を導き出していくには、社会正義感や文化的価値観の調整など、高い文化性を背景にした対話力が求められることになるだろう。

建築教育の変化を牽引するものとして、カウンセリングなどで一日の長のある医療・福祉を研究対象として教材とすることは有効と考えている。また、人と直接対面し、命や人生を考える機会が増えることで、工学技術者に欠けがちだった「哲学・倫理」を学ぶことになる点も見逃せない。

実際に人口構成が変化している現在、医療・福祉を念頭に置かないでまちづくりや公共性の高い建築物の計画はありえない点からも、新しい建築教育には積極的に医療・福祉・居住の視点を取りこむべきだと考える。

そして、必ずしも「建てない選択」ができる前提は、建築以外にもう1つ専門を持っている強みがなければできない点からも、他分野との融合は積極的に行うべき時代なのだと思う。

自分の研究上の専門性を大いに活かした教育に取り組んでいきたいと思っている。

3. 基礎教育

新しい挑戦を常に盛り込みながら、講義内容を工夫することが大切である。

しかし、実は前述したコーディネーター教育や文化的価値観の成熟などの難しい課題に立ち向かうには、結局、「手間隙かけた双方向の講義」を誠実に行うということにつきるのはのではないかと思う。

15歳から21歳までを預かる高専で9年、新設私立大学の立ち上げを支えた8年、教育中心の環境で、常に学生とからまりあつてともに切磋琢磨してきた経験からいえることである。

自分の研究フィールドである医療・福祉の現場での演習や、まちづくりの現場での演習、あるいは社会で活躍する各専門家との交流など、現場での教育プログラムを提供していきたいと思っている。学生を現場に出すことはなかなかしんどいが、やはり格段の教育効果があることは確かである。

また他方では、短期的な効果を得るための技能教育も重要である。すなわち、「当面のキャリア」を得るためにはCAD、積算、医療ビジネス、各種資格などの具体的な技術的な実践能力を卒業時に手にしておく戦略も必要である。

当面のキャリアを得るための技能と、長期間かけて成熟していくための基礎素養の両面教育に力を入れなければならないだろう。

4. 建築計画の専門教育

次世代の計画系の建築技術者に求められる能力としては、社会的背景を踏まえた「企画・計画力」、多様な意見を取りまとめ事業展開している「誘導力」等である。あわせて、建築の専門家としてはもちろん「その他の得意分野」に極めて高い専門性が求められるのではないかと考えている。

平成20年1月15日受付

※1 中級教育士（工学・技術）

東北文化学園大学科学技術学部住環境デザイン学科
(2008年度より「人間環境デザイン学科」へ学科名称変更)